

世界的植物学者 牧野富太郎

Tomitaro Makino



牧野富太郎

令和5年9月

<目次>

1.プロフィール

2.牧野富太郎の生涯

- 1) 幕末の時代
- 2) 「岸屋」に生まれる
- 3) 少年期 勉学に励む
- 4) 青年期 志を抱いて上京
- 5) 壽衛との出会い
- 6) 石版印刷屋の主人が仲人に
- 7) 『日本植物志図篇』の出版
- 8) 新種・ヤマトグサの発見
- 9) 植物学教室からの追放
- 10) ロシアへの夢、叶わず
- 11) 実家が経営不振に
- 12) 壮年期 植物学者として活躍
- 13) 晩年 大泉の地に引っ越す
- 14) 最後の日々 自邸の庭で研究する

3.富太郎ってどんな人？

1) スエコザサ命名秘話

2) 草木の精かも知れん

3) 牧野式植物図について

4. 妻・壽衛はどんな人？

1) 富太郎との出会い

2) 研究まみれで子だくさん 生活苦の日々

3) 借金の対応も・・・

4) 壽衛の死

5. ロシアの植物学者 マキシモヴィッチとはどんな人？

6. 小石川植物園で活躍した牧野富太郎

7. 牧野富太郎・年譜

1.プロフィール

植物学者 牧野富太郎博士（1862-1957）



牧野富太郎は、江戸時代末期の文久2年（1862）に土佐・高岡郡佐川村（現・高知県高岡郡佐川町）の裕福な商家の長男として生まれた。正式な学歴では、小学校中退ということになるが、寺子屋や私塾などで和漢学に加え、英語、オランダ語、さらには物理学、生理学、植物学など、西洋の近代科学を多岐にわたり学んだ。高知の豊かな自然に育まれ、幼少から植物に興味を持ち、本格的に植物学を志すようになった。西洋の近代植物学を独学で学び、自ら日本の植物をくまなく調査・採集して植物の知識を身につけていった。明治17年、22歳になった富太郎は2度目の上京で東京大学理学部植物学教室への出入りを許され、植物分類学の研究に打ち込むようになる。明治26年には、東京帝国大学理科大学の助手に任ぜられ、名実ともに植物学者の道を歩み出す。自ら創刊に携わった「植物学雑誌」に新種ヤマトグサを発表し、日本人として国内で初めて新種に学名をつけた。94年の生涯において収集した標本は約40万枚といわれ、蔵書は約4万5千冊を数える。新種や新品種など約1500種類以上の植物を命名し、日本植物分類学の基礎を築いた。

一人として知られている。現在でも研究者や愛好家の必携の書である「牧野日本植物図鑑」を刊行。全国からの要望に応じて各地を巡り、植物を知ることの大切さを一般に広く伝え、植物知識の普及にも尽力した。日本の植物相を解明しようと『日本植物志図篇』（1888-1891年）や『大日本植物志』（1900-1911年）などを出版し、博士の代表作『牧野日本植物図鑑』（1940年）は、現在まで改訂を重ね、植物図鑑として広く親しまれている。植物標本は、牧野が個人的に所蔵していた分だけでも40万枚に及んでいる。1953年に東京都名誉都民、1957年に文化勲章を受章している。



東京に上京した頃（左）、77歳（中央）、晩年（右）の牧野博士

2. 牧野富太郎の生涯

1) 幕末の時代

富太郎の生まれた時代は、嘉永6年(1853年) アメリカの使節ペリー来航に始まる幕末動乱の時代であった。富太郎誕生の一ヶ月前には坂本龍馬が土佐藩を脱藩する。この年には寺田屋事件、生麦事件があり、日本が近代国家への道を歩き出した時でもあった。まさに日本の夜明けと同じく、日本植物学の夜明けに富太郎は産声を上げたのであった。

2) 「岸屋」に生まれる

幼名を「成太郎」と名づけられた富太郎は 1862 年（文久 2 年）、土佐国佐川村（現：高知県高岡郡佐川町）で、近隣から「佐川の岸屋」と呼ばれた商家（雑貨業）と酒造業を営む裕福な家に生まれた。幼少のころから植物に興味を示していたと伝わる。3 歳で父佐平が、5 歳で母久壽（くす）が病死、6 歳の時には祖父小左衛門が亡くなった。幼い頃から体の弱かった富太郎は、祖母浪子によって大切に育てられた。

3) 少年期 勉学に励む

10 歳より土居謙護の教える寺子屋へ通い、11 歳になると義校である名教館（めいこうかん）に入り儒学者伊藤蘭林（1815 年 - 1895 年）に学んだ。当時同級生のほとんどは士族の子弟であり、その中に後の「港湾工学の父」広井勇らがいた。漢学だけではなく、福沢諭吉の『世界国尽』、川本幸民の『気海観瀾広義』などを通じ西洋流の地理・天文・物理学を学んだ。

名教館は学制改革により、校舎はそのままに佐川小学校となった。そこへ入学したものの 2 年で中退し、好きな植物採集に明け暮れる生活を送るようになる。小学校を中退した理由として、造り酒屋の跡取りだったので、小学校などで学業を修め、学問で身を立てることは全く考えていなかったからだと述べている。酒屋は祖母と番頭に任せ、気ままな生活を送っていた。15 歳から佐川小学校の「授業生」、すなわち臨時教員としておよそ 2 年間教鞭をとった。

4) 青年期 志を抱いて上京

佐川で勉強するだけでは物足りなくなった富太郎は、植物の採集、写生、観察などの研究

を続けながら、17 歳になると高知師範学校の教師永沼小一郎を通じて欧米の植物学に触れ、当時の著名な学者の知己も得るようになる。牧野は自叙伝で「私の植物学の知識は永沼先生に負うところ極めて大である」と記している。

そこで新しい科学としての植物学を教えられ意欲に燃えた富太郎は、第 2 回内国勸業博覧会見物と顕微鏡や書籍を買うため番頭の息子と会計係の 2 人を伴い明治 14 年(1881 年)、19 歳の時に初めて上京した。

そして、江戸時代の本草学者小野蘭山の手による「本草綱目啓蒙」に出会い、本草学、とりわけ植物学に傾倒する。自らを「植物の精（精霊）」だと感じ、日本中の植物を同書のようにまとめ上げる夢を抱き、それは自分にしかできない仕事だと確信するようになったのである

帰郷した 1881 年（明治 14 年）、富太郎は 2 歳年下の従妹でかねてから許嫁の猶（旧姓 = 山本）と祝言を挙げ、牧野猶は本家岸屋の若女将となる。

1884 年（明治 17 年）、富太郎は本格的な植物学を志し、22 歳の時に再び上京する。そこで東京大学理学部（後の帝国大学理科大学）植物学教室の矢田部良吉教授を訪ね、同教室に出入りして文献・資料などの使用を許可され研究に没頭する。そのとき、富太郎は東アジア植物研究の第一人者であったロシア帝国のカール・ヨハン・マキシモヴィッチに標本と図を送っている。富太郎は天性の描画力にも恵まれており、マキシモヴィッチから図を絶賛する返事が届いた。やがて 25 歳で、同教室の大久保三郎や田中延次郎・染谷徳五

郎らと共同で『植物学雑誌』を創刊。同雑誌には澤田駒次郎や白井光太郎、三好学らも参加している。

1887年（明治20年）、育ててくれた祖母、浪子が77歳で死去。

26歳でかねてから構想していた『日本植物志図篇』の刊行を自費で始めた。印刷工場に出向いて印刷技術を学び、絵は自分で描いた。これは当時の日本には存在しなかった、日本の植物誌であり、今で言う植物図鑑のはしりであり、マキシモヴィッチからも高く評価された。

この時期、富太郎は東京と郷里を往復しながら研究者の地位を確立していくが、その研究費は亡き祖母浪子に代わって猶が工面し、富太郎の求めるままに東京に送金したため、実家岸屋の経営は瞬くうちに傾いていった。

5) 壽衛との出会い

一方で富太郎は、彼の随筆によれば、明治21年（1888）、四度目の上京を果たした頃、麴町三番町（東京都千代田区）にあった、同郷の若藤宗則の家の二階に下宿していた。

この下宿から本郷にある帝国大学理科大学の植物学教室まで、富太郎は人力車で通っていたが、その途中の飯田町に、壽衛の母が営む菓子店があった。

富太郎はアルコール類は嗜まない。その代わりに、かなりの甘党であった。壽衛の母が営む菓子店にも自然に目がいき、ときおり店先に座っていた壽衛を見そめたという。富太郎26歳、壽衛15歳の年のことである。

6)石版印刷屋の主人が仲人に

富太郎は毎日のように人力車を止めて菓子店に立ち寄り、恋心を募らせていった。ところが、富太郎は壽衛の名前すら聞き出せなかったようで、石版印刷技術を習っていた印刷所の主人・太田義二に、「仲を取り持ってほしい」と頼み込んでいる。

太田の尽力により縁談はまとまり、同年の10月には、下谷区根岸の御院殿跡（輪王寺宮門跡の別邸）にあった村岡家の離れを借りて一目惚れした小澤壽衛（14歳）と所帯を持った。（渋谷章『牧野富太郎 私に草木の精である』）富太郎は自叙伝で、「結婚したのは、明治23年（1890）頃」と述べている。いずれにせよ、富太郎と壽衛は夫婦となった。仲人は太田が務め、翌年（明治21年）10月に第一子となる園子（1888年 - 1893年）が誕生している。

7)『日本植物志図篇』の出版

富太郎が壽衛と所帯をもったとされる明治21年の11月には、富太郎の宿願である日本植物誌の「図版」である『日本植物志図篇』第一巻第一集を、自費で出版している。

富太郎はすべての植物の原図を描き、製版も自ら手がけた。

日本初の西洋式の植物誌となる『日本植物志図篇』は、徳永政市助教授のモデルと思われる松村任三助教授も褒め称え、植物学界からも絶賛された。ロシアの植物学者・マキシモヴィッチも、「図が正確で素晴らしい」と賛辞の手紙を送っている。

『日本植物志図篇』は、その後も続刊されていった。

8)新種・ヤマトグサの発見

1889年（明治22年）、27歳で新種の植物を発見。『植物学雑誌』に発表し、日本ではじめて新種のヤマトグサに学名をつけた。1890年（明治23年）、28歳のときに東京府南葛飾郡の小岩町で、分類の困難なヤナギ科植物の花の標本採集中に、柳の傍らの水路で偶然に見慣れない水草を採集する機会を得た。これは世界的に点々と隔離分布するムジナモの日本での新発見であり、そのことを自ら正式な学術論文で世界に報告したことで、世界的に名を知られるようになる。「*Theligonum japonicum* Okubo et Makino」（テリゴヌム ヤポニクム オークボ エト マキノ）の学名をつけて、『植物学雑誌』に発表している（和名ヤマトグサ）。これは国内ではじめて、日本人が日本の植物の学名を発表した、植物学史に残る出来事であった。しかし同年、矢田部教授により植物学教室の出入りを禁じられ、研究の道を断たれてしまい、『日本植物志図篇』の刊行も六巻で中断してしまう。失意の富太郎はマキシモヴィッチを頼り、ロシアに渡って研究を続けようと考えたが、1891年にマキシモヴィッチが死去したことにより、実現はしなかった。

9)植物学教室からの追放

富太郎の自叙伝によれば、矢田部は「『日本植物志図篇』と同じような本を出版することが決まったから、今後は大学の書物や標本を見せるわけにはいかない」と宣告した。

富太郎は矢田部の私宅を訪れて、「今まで通り教室への出入りを許可してほしい」と訴えたが、聞き入れられなかったという。研究の道を断たれてしまい、『日本植物志図篇』の刊

行も六巻で中断してしまう。だが、ここで諦める富太郎ではない。彼は起死回生の一手を思いつく。ロシアの植物学者・マキシモヴィッチを頼り、ロシアに渡って研究を続けようと考えた。

10)ロシアへの夢、叶わず

このマキシモヴィッチに矢部田ら日本の植物研究者は、採集した植物標本を送り、学名を決めてもらっていた。富太郎も、約 800 点もの標本を送っている。

富太郎は神田駿河台（東京都千代田区）のニコライ主教に事情を説明し、ロシア行きの仲介を頼んだ。ニコライ主教は快諾し、マキシモヴィッチへ手紙を送ったが、富太郎のロシア行きは叶わなかった。

翌明治 24 年（1891）2 月 16 日、マキシモヴィッチが病死してしまったからだ。

富太郎は深い悲しみと絶望に陥ったと、自叙伝で述べている。

11)実家が経営不振に

1891 年（明治 24 年）、実家の岸屋がついに破綻し、家財を精算するために帰郷した。このとき当主の富太郎は、猶と番頭の井上和之助を結婚させて店の後始末を託した。

富太郎は郷里の高知に帰郷中、地元の植物の研究を行ない、西洋音楽の演奏会を開いて自ら指導し、時には指揮者として指揮棒を振ったりしていたが、知人らの助力により、駒場農学校（現・東大農学部）にて研究を続けることができるようになり帰京した。

12)壮年期 植物学者として活躍

1893 年（明治 26 年）、矢部田非職後に東京帝国大学理科大学の主任教授となった松村任

三教授に呼び戻される形で助手となった。助手の月給で一家を養っていたが、文献購入費などの研究に必要な資金には事欠いていた。それでも、研究のために必要と思った書籍は非常に高価なものでも全て購入していたため多額の借金をつくり、ついには家賃が払えず、家財道具一切を競売にかけられたこともある。

その後、各地で採集しながら植物の研究を続け、多数の標本や著作を残していく。ただ、学歴の無いことと、大学所蔵文献の使用法（研究に熱中するあまり、参照用に借り出したままなかなか返却しないなど）による研究室の人々との軋轢もあり、厚遇はされなかった。松村とは植物の命名などを巡って対立もしている。

1900年（明治33年）から、未完に終わった『日本植物志図篇』の代わりに新しく『大日本植物志』を刊行する。今回は自費ではなく帝大から費用が捻出され、東京の大手書店・出版社であった丸善から刊行された。だがこれも松村の妨害により、4巻で中断してしまった。

1916年（大正5年）には個人で『植物研究雑誌』（英語版、wikidata）を創刊（3号までは自己負担による発刊）。発刊間隔が空いたり、池長孟からの援助が打ち切られたりするなど、その刊行継続は必ずしも順調ではなかった。支援者であった中村春二の死去により再び行き詰まった後、1926年（大正15年）に津村重舎（後には会社としての津村順天堂）の財政的援助を得て復刊にこぎ着けている。

1912年（明治45年）1月30日（牧野49歳）から1939年（昭和14年）5月31日（77歳）まで東京帝国大学理科大学講師を勤める。この間、学歴を持たず、権威を理解しない牧野に対し、学内から何度も圧力があつたが、結局牧野は帝大に必要な人材とされ、助手時代（1893年（明治26年）9月11日）から計約46年間、大学に留任している。

13)晩年 大泉の地に引っ越す

大正15年（1926年）に北豊島郡大泉村（現練馬区立牧野記念庭園の所在地）に居を定め亡くなるまで暮らした。昭和2年（1927年）に周囲の声もあって富太郎は理学博士の学位を受ける。世間的には名誉なことではあるが、自らが平凡になったと思う気持ちもあった。翌昭和3年、富太郎に献身的に尽くしてきた妻壽衛が亡くなった。富太郎は、感謝の思いを込めて、仙台で発見して間もないササに妻の名前をつけることにしてスエコザサと名づけた。その悲しみを乗り越え、引き続き各地に赴き採集に励む。

一方で、植物図鑑の編集に取りかかり、10年近い歳月をかけてようやく完成した。

『牧野日本植物図鑑』（北隆館 1940年）の誕生である。また、昭和14年（1939年）に47年間勤務した大学の講師の職を退いた。その後も植物とともに歩み、植物の知識を広めようと執筆にも力を入れて『植物記』（桜井書店 1943年）や『植物一日一題』（東洋書館 1953年）などの植物随筆集を出版した。

14)最後の日々 自邸の庭で研究する

山へ採集に出かけられなくなった90歳ごろから、富太郎は自宅の庭で長い時間を過ごす

ようになった。庭に移植した植物を観察・採集したり、標本を整理したり、時に、訪問客と尽きることのない植物の話題に花を咲かせていた。病床につく 93 歳まで、家族の心配をよそに寝る間を惜しんで植物の研究や、書き物を続けたエピソードが伝えられている。昭和 32 年（1957 年）1 月 18 日に満 94 歳で亡くなった。



牧野富太郎墓碑

3. 富太郎ってどんな人？



高知県出身の牧野富太郎は日本が世界に誇る植物分類学の第一人者だ。

一生涯を通して植物分類学の研究に打ち込み、新種や新品種など 1,500 種類以上の植物を命名した。また日本全国で採集調査を行い、生涯において収集した植物標本は 40 万枚ともいわれ、蔵書は 45,000 冊を数える。植物知識の教育普及活動にも全国規模で尽

力し、地元の植物研究家、愛好家などの育成に努めた。78歳で刊行した『牧野日本植物図鑑』は、これまでの研究と普及活動の集大成であり、専門家から一般の人々まで今なお広く愛用されている。

1)スエコザサ命名秘話



研究に惜しみなくお金をつぎ込む富太郎をあの手この手で工面して献身的に支えたのが妻・壽衛(すえ)であった。学問に私情を挟むことを好まなかった富太郎だが、誰よりも植物研究の重要性を理解し、思うままにさせてくれた愛妻の激励と内助に感謝し、1927(昭和2)年に仙台で発見した新種の植物をスエコザサと名付け、学名と共に『植物研究雑誌』に発表した。発表の5日前に壽衛は病のため永眠したが、富太郎は墓標に「世の中のあらむかぎりやすゑ子笹」と刻み、東京練馬の自宅の庭に植えて終生大切にしたという。

2)草木の精かも知れん

自叙伝において「私は植物の愛人としてこの世に生まれ来たように感じる。あるいは草木の精かも知れんと自分で自分を疑う。」と述べていた富太郎。植物採集へ出かける際には必ず、シャツに蝶ネクタイ。恋人である植物に会うのだからと、植物への愛と尊敬の気持ちを服装に表して

いたようだ。晩年、病床にあっても植物採集や珍しい植物を見つけた夢など見て翌朝家族に話していたそうで、家族が富太郎を植物の精ではないかと思うほどであった。



3)牧野式植物図について

富太郎の植物図は、単なる写生ではなく、複数の個体を観察した上でその植物の典型的な形態を捉えている点、花期や果実期など各生長段階を精密に描写している点が最大の特徴で、「牧野式植物図」とよばれています。緻密で精密な描写、表現力は世界的に高い評価を受けています。描画にあたっては主に根朱筆(ねじふで)を用いていますが、自ら加工するなど、道具にもこだわりました。



図) コオロギラン

4. 妻・壽衛はどんな人？



妻・壽衛 画像提供 高知県立牧野植物園

1) 富太郎との出会い

壽衛は、1873年（明治6年）、小澤一政の次女として東京飯田町に生まれた。父親の一政は、彦根藩主・井伊家の家臣で、明治維新後は陸軍に勤務していた。母親は「あい」という名の、京都生まれの女性であったという。

父親の存命中は広大な邸宅に住み、踊りや唄、お花やお茶を習うなど、壽衛の生活は恵まれていたようだ。

子どもの頃は家が裕福で、踊りや唄を習うなど豊かな暮らしをしていたという。

しかし、陸軍に勤めていた父が亡くなった後は邸宅も財産も失って、東京で母とともに小さな「小沢」という菓子屋を営んで生計を立てていた。

富太郎が壽衛と出会ったのはその菓子屋であった。大学に通うときに店の前を通ってい

て、壽衛を見初めたのである。富太郎は石版印刷の修行中だったため、印刷屋の主人に仲

人を頼み、1888年（明治21年）、ふたりは所帯をもった。富太郎が26歳、壽衛が15歳の時であった。



壽衛と牧野富太郎 画像提供 高知県立牧野植物園

2)研究まみれで子たくさん 生活苦の日々

夫婦の間には子どもが13人生まれた。ふたりでの生活を始めた富太郎と壽衛。その生活は楽なものではなかった。富太郎の使う研究費は膨大で、援助してくれていた佐川の生家はやがて破綻。それにもかかわらず、大量の標本や本を補完するため、家賃が給料より高い家を借りていたという。

富太郎は友人から「百円の金を十円に使った」と言われるほど金銭に無頓着だったようだ。苦しい生活の中で家計のやりくりなどの一切を担ったのが壽衛であった。

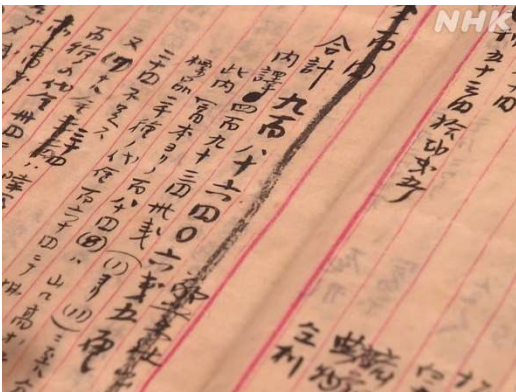
「この苦境にあって、十三人もの子供にひもじい思いをさせないで、とにかく学者の子として育て上げることは全く並大抵の苦勞ではなかったろうと、今でも思い出す度に可哀そ

うな気がする」

牧野富太郎著『牧野富太郎自叙伝』（講談社 2004 年）

高知県立牧野植物園には、借金的一端がわかる記録が残されている。

大学を卒業した国家公務員の初任給が「五十円」ほどだった時代、負債はその約 20 倍にあたる「九百八十六円」だと記されている。



『負債ノ額』1895 年 高知県立牧野植物園所蔵

借金取りの対応をするのは壽衛の役目であった。

3)借金の対応も・・・

生活費や研究費をまかなうため、富太郎は借金を重ねた。

「月給は十五円でとてもやりきれぬし、そうむやみに他人が金を貸してくれる訳もなく、ついやむなく高利貸から借金をした」

牧野富太郎著『牧野富太郎自叙伝』（講談社 2004 年）

「いつだったか壽衛子は何人目かのお産をしてまだ三日目なのにもう起きて遠い路を歩き債権者に断わりに行ってくれたことなどは、その後何度思い出しても私はその度に感謝の念で胸がいっぱいになり、涙さえ出て来て困ることがあります。

実際そんな時でさえ私は奥の部屋でただ好きな植物の標本いじりをやっていることの出来たのは、全く妻の賜であったのです」

牧野富太郎著『牧野富太郎自叙伝』（講談社 2004 年）

出産 3 日後に歩いて債権者との交渉に出向く……。身体への負担は小さくなかったはずで
す。その間、富太郎は研究に没頭していた。

自叙伝には、壽衛が「まるで道楽息子を一人抱えているようだ」と言いながら、自分は古
いつぎだらけの着物を着て、芝居などの娯楽も求めずに家計をやりくりし、生活を支えて
いたことがしるされている。

4) 壽衛の死

子育て、家計のやりくり、借金取りへの対応など、さまざまな側面から富太郎を支えてい
た壽衛は、1928 年（昭和 3 年）に 55 歳で亡くなった。



富太郎と壽衛 画像提供 高知県立牧野植物園

富太郎は壽衛の闘病中に発見した新種のササを「スエコザサ」と命名し、献身的に研究生活を支えてくれた妻に感謝の気持ちを表している。

そして、こんな句をささげた。

家守りし妻の恵みやわが学び

世の中のあらん限りやスエコ笹

牧野富太郎著『牧野富太郎自叙伝』（講談社 2004 年）



高知県立牧野植物園に生えるスエコザサ

生涯を通して植物の研究を続けた富太郎。それができたのは、生活費や研究費が重なる中で家計をやりくりして富太郎が研究できる環境を整え、献身的に支えてくれた人がいたからこそだった。

5. ロシアの植物学者 マキシモヴィッチとはどんな人？



カール・ヨハン・マキシモヴィッチ

マキシモヴィッチは、東アジアの植物研究の権威である。1827年、モスクワ近郊のツォラで生まれた。富太郎より35歳年長である。医師を目指してドルバット大学に入るが、大学で植物学者のブンゲ教授と出会い、植物分類学に転じた。卒業後は、ロシア帝室植物園に務めている。

1853年、26歳のとき、ロシアの学術探検隊に加わり、フリゲート艦・ディアナ号で世界周遊に旅立つが、途中で下船し、アムール河沿いの植物調査を行なった。このときの成果を1859年に『アムール地方植物誌予報』として出版し、科学や芸術などの優れた業績に与えられるデミドフ賞を受賞。植物学者としての地位を築いた。

万延元年(1860)年には、植物調査のため、箱館(函館)に来航している。3年5ヶ月もの間、日本に滞在し、プラント・ハンターとして雇った須川長之助に、各地の植物を採集させた(当時、外国人は開港場から十里までしか、旅行が許されなかったため)。

須川長之助は、富太郎ともゆかりがある人物である。

マキシモヴィッチは帰国後、ロシア科学アカデミーの会員となった。

6. 小石川植物園で活躍した牧野富太郎

東京大学大学院理学系研究科附属植物園小石川本園(通称:小石川植物園)は、1877年の東京大学設立当時から植物学科の研究の場として利用されてきた。1886年に帝国大学理科大学の管理下となり、1897年に植物学教室が本郷より移転されてからは、園での研究はますます活発になっていった。

土佐出身の牧野富太郎（1862-1957）も小石川植物園で研究を行った一人である。彼は1884年に東京大学理学部教授だった矢田部良吉と面会し、その植物知識の深さから植物学教室への出入りを許され、1893年から1939年まで同教室に在籍した。富太郎は1500種以上の植物の記載に関わり、日本の植物分類学の礎を築いた一人である。『植物学雑誌』や『植物研究雑誌』などの学術雑誌を刊行したほか、植物図鑑の基となる『日本植物志図篇』など多数の著作を残し、植物学の普及にも大きく貢献した。

植物を描く名手でもあった富太郎は、植物の特徴を精密な植物図と共に記した。ここに展示されている『牧野日本植物図鑑』（1940年刊行）は、富太郎が78歳の頃の著作で、日本の野生植物3206種を図解した研究の集大成である。



植物園にあった植物学教室で撮影された牧野富太郎

7. 牧野富太郎・年譜

西暦	和暦	年齢	主なできごと
1862	文久 02 年	00	4 月 24 日、現在の高知県高岡郡佐川町で酒造と雑貨を営む裕福な商家、岸屋の一人息子として生まれる。幼名を成太郎と言う。
1863	文久 03 年	01	
1864	元治 01 年	02	
1865	慶応 01 年	03	父、佐平死去。
1866	慶応 02 年	04	
1867	慶応 03 年	05	母、久寿死去。
1868	明治 01 年	06	祖父、小左衛門死去。この頃、富太郎と改名。祖母、浪子に育てられる。
1869	明治 02 年	07	
1870	明治 03 年	08	
1871	明治 04 年	09	
1872	明治 05 年	10	土居謙護の寺子屋で習字を学ぶ。
1873	明治 06 年	11	伊藤徳裕（蘭林）の塾で漢学、名教館で西洋の諸学科を学んだほか、英語学校で英語を学ぶ。後の妻、小澤壽衛生まれる。
1874	明治 07 年	12	佐川小学校に入学。
1875	明治 08 年	13	
1876	明治 09 年	14	この頃、小学校の授業に飽き足らず自主退学。採集した植物を「重訂本草綱目啓蒙」などで調べ植物の名前を覚える。
1877	明治 10 年	15	佐川小学校の臨時教員となる。この頃、横倉山などに出かけて植物採集をしていた。昆虫にも興味を持ち採集する。
1878	明治 11 年	16	
1879	明治 12 年	17	佐川小学校の臨時教員を辞め高知市へ出る。弘田正郎の五松学舎に入塾する。
1880	明治 13 年	18	植物の観察図や観察記録をつくる。高知中学校教諭の永沼小一郎を知り欧米の植物学の影響を受ける。
1881	明治 14 年	19	顕微鏡や書籍を購入するため上京。第二回内国勸業博覧会見物のほか、農商務省博物局に田中芳男、小野職愨らを訪ね、日光などで植物採集し帰郷する。高知県西南部で植物採集を行う。
1882	明治 15 年	20	小野職愨、理学博士の伊藤圭介に植物の質問の手紙を出す。この頃、自由民権運動にたずさわる。
1883	明治 16 年	21	
1884	明治 17 年	22	二度目の上京。東京大学理学部植物学教室を訪ね、教授の矢田部良吉と助教授の松村任三を知り、教室への出入りが許される。
1885	明治 18 年	23	高知県西南部ほかで植物採集を行う。
1886	明治 19 年	24	三度目の上京。東京近郊で植物採集を行う。この頃、石版印刷技術を習得する。

1887	明治 20 年	25	「植物学雑誌」の創刊に携わる。この雑誌の巻頭論文として「日本産ヒルムシロ属」を掲載した。祖母、浪子死去。
1888	明治 21 年	26	四度目の上京。この頃、壽衛（すえ）と結婚し東京根岸に所帯を持つ。「日本植物志図篇」刊行を始める。
1889	明治 22 年	27	「植物学雑誌」第 3 巻第 23 号に大久保三郎と日本で初めて新種「ヤマトグサ」に学名を付ける。 佐川理学会発足。 横倉山でコオロギラン発見。マキシモヴィッチに標本を送る。
1890	明治 23 年	28	現在の東京都江戸川区でムジナモを発見する。植物学教室への出入りを禁止され、マキシモヴィッチを頼りロシア行きを決意する
1891	明治 24 年	29	マキシモヴィッチの死去によりロシア行きを断念する。実家整理のため帰郷。高知県下で植物採集を行う。
1892	明治 25 年	30	
1893	明治 26 年	31	帝国大学理科大学嘱託、臨時雇用を経て助手となる。月俸 15 円。 京都府、愛知県、岐阜県、滋賀県、高知県へ植物採集のため出張命令が出る。
1894	明治 27 年	32	京都府、愛知県、滋賀県、静岡県へ植物採集のため出張命令が出る。
1895	明治 28 年	33	
1896	明治 29 年	34	台湾へ植物採集のため出張命令が出る。
1897	明治 30 年	35	
1898	明治 31 年	36	
1899	明治 32 年	37	「新撰日本植物図説」刊行を始める。
1900	明治 33 年	38	農事試験場嘱託となる。「大日本植物志」第 1 巻第 1 集を発行。このシリーズは第 4 集まで発行された。
1901	明治 34 年	39	「日本禾本莎草植物図譜」「日本羊歯植物図譜」刊行を始める。
1902	明治 35 年	40	
1903	明治 36 年	41	
1904	明治 37 年	42	
1905	明治 38 年	43	
1906	明治 39 年	44	滋賀県、岡山県、鳥取県、福岡県の各地で植物採集会を指導する。「日本高山植物図譜」（三好学と共著）発刊。
1907	明治 40 年	45	東京帝室博物館嘱託となる。「増訂草木図説」刊行を始める。
1908	明治 41 年	46	
1909	明治 42 年	47	横浜植物会が創立される。会の指導に当たる。新種ヤッコソウを発表（この植物は牧野標本館のシンボルマークとなっている）。
1910	明治 43 年	48	東京帝国大学理科大学助手の休職を命じられ、同大学の植物調査嘱託となる。
1911	明治 44 年	49	千葉県立園芸専門学校嘱託となる。東京植物同好会が創立され、会長となる。
1912	大正 01 年	50	東京帝国大学理科大学講師となる。

1913	大正 02 年	51	植物学者の白井光太郎、齋田功太郎、木村彦右衛門らとともに、来日したドイツの植物学者、エングラールと日光で植物採集を行う。エングラールはドイツの有名な植物分類学者である。 岡山県、広島県、高知県で植物採集会を指導する。
1914	大正 03 年	52	千葉県立園芸専門学校に辞表を提出する。神奈川県、岡山県、鹿児島県で植物採集会を指導する。
1915	大正 04 年	53	
1916	大正 05 年	54	素封家の池長孟から援助の申し出がある。「植物研究雑誌」を創刊。
1917	大正 06 年	55	
1918	大正 07 年	56	兵庫県神戸市に池長植物研究所が開設される。開所式に壽衛とともに出席する。
1919	大正 08 年	57	
1920	大正 09 年	58	
1921	大正 10 年	59	
1922	大正 11 年	60	成蹊高等女学校長の中村春二より支援を受ける。
1923	大正 12 年	61	
1924	大正 13 年	62	東京帝室博物館より解囑される。伊勢神宮の植物調査を行う。
1925	大正 14 年	63	
1926	昭和 01 年	64	壽衛の尽力により、現在の東京都練馬区東大泉に居を構える。
1927	昭和 02 年	65	4 月、東京帝国大学から理学博士の学位を受ける。論文の題は「日本植物考察（英文）」。同年に仙台で発見した新種の笹に、翌年死去する妻の名をとって「スエコザサ」（学名： <i>la ramosa var. suwekoana</i> ）と名付けた。
1928	昭和 03 年	66	妻・壽衛死去。
1929	昭和 04 年	67	
1930	昭和 05 年	68	
1931	昭和 06 年	69	
1932	昭和 07 年	70	
1933	昭和 08 年	71	
1934	昭和 09 年	72	高知県中～東部で植物採集を行う。「牧野植物学全集」刊行を始める。
1935	昭和 10 年	73	岡山県、大阪府、岐阜県、福井県、富山県で植物採集会を指導する。
1936	昭和 11 年	74	高知帰郷。高知市近郊で植物採集を行う。
1937	昭和 12 年	75	朝日文化賞を受賞。
1938	昭和 13 年	76	長崎県、鹿児島県、熊本県、福岡県、兵庫県、愛媛県、広島県、大阪府、高知県で植物採集を行う。
1939	昭和 14 年	77	東京帝国大学へ辞表を提出、講師を辞任する。
1940	昭和 15 年	78	広島県、愛媛県、大分県で植物採集会を指導する。大分県犬ヶ嶽で採集中に転落事故に遭い別府で静養する。

			東京帝国大学を退官後、78歳で研究の集大成である「牧野日本植物図鑑」を刊行。この本は改訂を重ねながら現在も販売されている。
1941	昭和 16 年	79	現在の中国東北部へサクラ調査に赴く。池長植物研究所で保管されていた標本が返還され、華道家の安達潮花より標品館の寄付を受ける。
1942	昭和 17 年	80	
1943	昭和 18 年	81	
1944	昭和 19 年	82	
1945	昭和 20 年	83	空爆により標品館の一部が被弾し、山梨県北巨摩郡穂坂村（現・韮崎市）に疎開する。
1946	昭和 21 年	84	個人雑誌「牧野植物混混録」刊行を始める。
1947	昭和 22 年	85	
1948	昭和 23 年	86	皇居に参内、昭和天皇に植物学をご進講。
1949	昭和 24 年	87	大腸カタルで危篤となるも奇跡的に回復する。
1950	昭和 25 年	88	日本学士院会員となる。
1951	昭和 26 年	89	未整理のまま自宅に山積みされていた植物標本約 50 万点を整理すべく、朝比奈泰彦科学研究所所長が中心となって「牧野博士標本保存委員会」が組織。文部省から 30 万円の補助金を得て翌年にかけて標本整理が行われた。同年設立された第 1 回文化功労者の対象者となる。
1952	昭和 27 年	90	佐川の生家跡に「誕生の地」の記念碑が建つ。
1953	昭和 28 年	91	東京都名誉都民第一号に選ばれる。
1954	昭和 29 年	92	風邪をこじらせ肺炎となり病臥する。
1955	昭和 30 年	93	東京植物同好会が牧野植物同好会として再開する。
1956	昭和 31 年	94	「植物学九十年」・「牧野富太郎自叙伝」を刊行。 高知県高知市五台山に牧野植物園設立決定。佐川町名誉町民となる。病状が悪化し重体となり、昭和天皇よりお見舞いのアイスクリームが届く。
1957	昭和 32 年	94	1 月 18 日 永眠。東京都台東区谷中の天王寺墓地に埋葬。没後従三位に叙され、勲二等旭日重光章と文化勲章を追贈された。
1958	昭和 33 年		4 月、高知県高知市五台山に高知県立牧野植物園開園。 東京都立大学理学部牧野標本館開館。 練馬区牧野記念庭園開園。
2008	平成 20 年		練馬区名誉区民に選定。



高知県立牧野植物園牧野富太郎記念館本館



縁側。万太郎は完成した図鑑のページをめくる。謝辞には田邊（要潤）徳永（田中哲司）大窪（今野浩喜）波多野（前原滉）藤丸（前原瑞樹）野宮（亀田佳明）ら植物学教室の面々、寿恵子ら家族、夭折した長女・園子の名前もある。ポタン、ヒメスミレ…。夫婦の歩みがよみがえる。寿恵子は「きれい、万ちゃん。こんなにたくさんの草花。3206種。万ちゃん、爛漫（らんまん）ですね」と涙。万太郎も「爛漫じゃ」——。最後のページにスエコザサ。「私の名前？じゃ、私、万ちゃんと永久に一緒にいれるのですね」「寿恵ちゃん、わしを信じてくれて、ありがとう。寿恵ちゃんはずっと、わしを照らしてくれた。寿恵ちゃんがわしの命そのものじゃ」「万ちゃんこそ、私のお日様でした。でも、約束ね。私がいなくなったら…。いなくなったら、いつまでも泣いていては駄目ですからね。万

太郎さんと草花だけ。草花に、また会いに行ってね。そしたら、私もそこにいますから。草花と一緒に、私もそこで待っていますから」。万太郎は寿恵子を抱き締め「愛しちゅう。愛しちゅう。寿恵ちゃん、わしら、ずっと一緒じゃ」――。

